

	[誤]	→	[正]
1 頁〔目次〕	池 <u>島</u>	→	池 <u>嶋</u>
4 頁上段14行目	論じ <u>も</u> のである。	→	論じ <u>た</u> ものである。
66 頁上段16行目	<u>井上</u> 真理亜	→	<u>荒井</u> 真理亜
69 頁下段6行目～7行目	草書・行 <u>商</u> ・楷書	→	草書・行 <u>書</u> ・楷書
70 頁下段11行目	前提とし <u>た</u> 書かれる→		前提とし <u>て</u> 書かれる

—— 編集後記 ——

▲国会図書館に通い始めた頃は、なかなか自分の名前が呼ばれないのに苛立ちを募らせる、大病院の薬局や会計窓口のような印象だった。大病院の方もずいぶん改善されて、昨年10月にオープンした北播磨総合医療センターでは、携帯電話のような〈呼出受信機〉と診察券とで用が足せる。困惑している利用者をサポートする要員が配置されているのも、現在の国会図書館と似たようなシステムだ。

▲国会図書館の事業などでも、デジタルアーカイブが構築されて便利になった。一頁ずつ雑誌を繰った時間（全ての記事が目次に載せられているとは限らない）、新聞の縮刷版を繰って手に残った薄黒い汚れ、上下に流れるマイクロリーダーの画面を見ていて味わったジェットコースターに乗ったような気分（ジェットコースターは苦手なので、正直なところ少々気分が悪くなりそうになる）は、いったい何だったのだろうか、とも思う。自分の心の内を覗いてみると、「私は長い時間をかけてコツコツ調べたものだ」（勿論、「最近の研究者は……」と続く）、と言いたいわけだ。手間暇かけて調べる必要がなくなると、自分の仕事を一つ奪われたような気がしないでもない。

▲かつて某氏から「コピー」で用を足す若い研究者だと窘められたらしい。地方国立大学の教養部や教育学部に勤めていて、長男・次男・長女の教育費を思えば、経済的余裕はさほどない。出張旅費（国立大学としては恵まれていたが、当時は出張費は限定されて、他の費目から流用できなかった）も潤沢ではない。国会図書館や日本近代文学館・神奈川近代文学館へ頻繁に行けるわけではない。東京出張は年1回、数日の滞在。時間不足はコピーで補うほかに手はなかった。現物を確認した上で、とにかくコピーを入手する。「コピー」だけで資料を整えていたわけでないにしても、それが十分でないことは分かっている。しかし、自分では、与えられた条件の中で可能なことをしていたのだから、窘められたという自覚は生じようがない。が、後になって、某氏の側では私が窘めるべき標的だったと側聞した。いやはや、光栄なことだ。それを聞いても、東京に住んで潤沢な資金を抱えているお方は暢気なものだ、という感想しか浮かばなかった。

▲デジタルアーカイブが整備されると立場が変わったようで、現物を調査しない研究者は駄目だといった感想がつつい浮かんできて、些か戸惑っている。

▲井伏鱒二自身の言に従ってその出生地を「深安郡加茂村」としていたが、本号掲載「井伏鱒二著作ノート」に記したように井伏出生当時は「深安郡」ではなく「安那郡」が正確な呼称であった。『広島県現代文学事典』（勉誠出版、2010年10月）で井伏鱒二の項を担当した時、編者の岩崎文人氏に指摘されるまで、誠にうっかりしていた。皮肉なのは、インターネットで見つけたデジタルアーカイブの御陰で、「深安郡」の成立時期を公文書で確認できるし、それをしたことだ。官報だけでなく、「御名」「御璽」のある原本までネットで見られる。私も「現物を手にしない研究者」である。

▲第25号を出すということは、私が現在の勤務先に移ってから四半世紀が過ぎた計算になる。だが、そんなに年月が経ったようには思えない。その思えないところが、老化であろう。第25号で何かの記念という余裕は全くない。明日の月曜日午前中には印刷用の原稿を渡さないといけな。とにかく、第25号はかたちを整えて、発行するだけで精一杯だ。正しく自転車操業だが、体力・気力の許す限り、来年に向けて自転車をこごしかあるまい。  
(前田貞昭)

兵庫教育大学 近代文学雑誌 第25号

ISSN 0918-8770

〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1

兵庫教育大学大学院 教育内容・方法開発専攻

文化表現系教育コース言語系教育分野（国語）

前田研究室

TEL. & Fax. 0795-44-2083 (ダイヤル)

E-mail : sadm@hyogo-u.ac.jp

印刷 株式会社フジワラ

2014年2月20日発行

(非売品)